

# イギリス理想主義研究年報

第14号 2018

# The Bulletin of the Japanese Society for British Idealism

---

No. 14

Summer 2018

---

## KEYNOTE ADDRESS

- A Study through Business Ethics about C. B. Macpherson's Political Theory  
..... Toshihiro Komatsu..... 1

## ARTICLES

- Kotaro Tanaka's Theory on Educational Aim ..... Yumi Kotani.....11  
Understanding of the Infinity and the Laws of the Universe as the Idea  
which brings great strides on Utilitarianism ..... Katsuaki Fujinaga.....20  
Harriet Martineau and Moral on Society ..... Keiko Funaki.....29  
Budding of 'Democratic care' in Dewey's Ethics ..... Tadashi Ryuzaki.....37  
A Report on Anglo-Japanese International Workshop on British Idealism  
..... Hanno Terao.....45

## BOOK REVIEWS

- Samuel Fleischacker, *A Short History of Distributive Justice*,  
Harvard University Press, 2004 (中井大介訳『分配的正義の歴史』晃洋書房、2017)  
..... Keiko Funaki.....50  
Bob Plant, *Wittgenstein and Levinas: Ethical and Religious Thought*, Routledge,  
2005. (米澤克夫監訳、三和書房、2017年) ..... Kiyoshi Ito.....53  
Yoshinori Eto, *The Thought of Shinichiro Nishi: Asking' Peace and reconciliation'  
from Hiroshima*. (Hiroshima University Press, 2018) ..... Shigeru Yukiyasu.....56  
*Educational Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan*, edited by  
Yoko Yamasaki and Hiroyuki Kuno, (Routledge, 2017 222p. Xii)  
..... Asahiro Arai.....59

## REGIONAL SESSIONS

- The Fourteenth Kanto Session ..... 61  
The Fourteenth Kansai Session ..... 67
-

を手がかりに考察を進めようとするのだが、さらにレヴィナスの倫理学をウィトゲンシュタインの「最小限の自然主義」を手がかりに修正しようともしている。

こうして見ると本書は、レヴィナスを補助線にウィトゲンシュタインを再解釈すると同時にウィトゲンシュタインを基にレヴィナスを論じるという、二正面での議論を行っている。それは、著者の言葉を借りるならば「レヴィナスとウィトゲンシュタインを相互批判的に交渉させることによって、彼らの各々の哲学的構想を近づける」試みである。その意味で本書は、ウィトゲンシュタイン研究のみならず、レヴィナス研究にも一石を投じるものである。

先に述べたように、我が国のウィトゲンシュタイン研究において、倫理・宗教の問題は看過されてきたと言っても過言ではない。そうした中、本書によってウィトゲンシュタインにおける倫理・宗教の問題に関する研究に新たな道標が加わったことは、きわめて意義深い。米澤氏を始め訳者の方々に敬意を表するとともに、心より感謝を申し上げたい。

(桃山学院大学)

## 書評

### 衛藤吉則『西晋一郎の思想－広島から「平和・和解」を問う－』 (広島大学出版会、2018年、207頁、2,900円)

行安茂

西晋一郎(1873-1943)は今ではほとんど知られていないのではないかと推察される。

西は日本で初めてT.H.グリーンの *Prolegomena to Ethics* (1883) を翻訳した人として知られ、広島高等師範学校、広島文理科大学の教授として倫理学を講義した教育者であり、思想家であった。今日、西の思想を再検討し、その今日的意義を問うため本書を執筆したのは衛藤吉則教授(広島大学)である。教授はR.シュタイナーの教育思想の研究者であるが、このたび思うところがあって西晋一郎の思想構造の研究に志し、見事に本書を完成された。本書の構成は以下のとおりである。

#### 第一部 理論

##### 序論

- 1 西思想への注目とその原風景
- 2 西思想における「特殊即普遍のパラダイム」
- 3 西思想の現代的意義
- 4 ナショナリズムとの距離

##### 結論

#### 第二部 資料編

- 1 西文庫目録
- 2 著作・講義の分類
- 3 関連文献(追想録、研究書、研究論文、講義録復刻版)
  - (1) 追想録
  - (2) 研究書
  - (3) 研究論文
  - (4) 西晋一郎講義 復刻版
- 4 縄田二郎氏寄贈図書類
- 5 西晋一郎略年譜

著者は「特殊即普遍」の理を中心として西思想の核心に迫り、その構造を明らかにする。西の思想は「普遍即特殊」であり、普遍と特殊とは別個のものではない。それらは実在の二相である。この視点から西の思想を解釈することによって著者の西解釈を補足してみたい。

西によれば、実在は普遍と特殊の両相を含む。普遍は特殊として具体化される。特殊から離れた普遍は抽象であって真の実在ではない。実在においては普遍と特殊とは表裏一体である。特殊は普遍の個性化である。花を見ても人間を見てもその具体的特殊性は個性の表現である。それは特殊の「異様」の「趣」をもつと西はいう。外見的には個性は個々の

物、個々の人間にあっては違った観を呈するが、それは実在の多様性として発現したものである。そこには「一」と「多」との関係が見られると西はいう。

特殊は外見には特殊性として現われるけれども、それぞれの特殊は「完結自全」であると西はいう。この点は、西の深い洞察として注目される。一輪の花も人も実在においてはそれぞれ本来「完結自全」である。それはありのままの姿である。なぜかといえばそれらは統一性の表現であるからである。実在はこの統一性の意味である。それは自然であると解釈することもできる。

真、善、美は実在の具体的普遍への名称である。特殊が真、善、美の相を呈しないとすれば、実在の統一性が特殊の相においてそのまま現われていないからである。問題は特殊の相に意識されていない「間隙」が介在していることにある。間隙がある以上、意識が必ずしもとらえることのできない隙（すき）間がギャップとしてあり、これが実在の統一性を妨げる。そのため特殊相は善美を呈することができない。隙間はストレートな自然の自己表現を阻止するが、この事実は多くの場合見逃される。実在が特殊相として発現することの難しさがこのあたりに存すると見ることができる。

隙間ができるのはなぜであろうか。西によれば、実在が「純動」になっていないからである。実在は一面では、変化する。この中において実在が統一を維持しつつ「進動」するのはこの動きが「純動」であるからである。「純動」とは何か。それは静かな意識の動である。西が「純動」を「純静」とよぶのはそのためである。「純静」とは心が全く静かな状態であるが、この静かな動きが可能であるのは心が「至静」になっているからである。「至静」は意識の停止ではなくて、生命の静かな流れであると解釈することができる。「至静」において初めて動きは一步一步確実にして充実したプロセスをたどる。一步一步の活動は自然に帰ることであり、ここに充実があると西は見る。動中の静とはこのような状態であると理解できる。西はこれを「即今充足の境」とよぶ。「即今」とは厳密に言えば瞬間の「今」であり、今の一步一步が充実として感得されるのである。

さて、本書の副題にかかげている「広島から『平和・和解』を問う」は最も注目されるテーマである。本書の結論「西思想とナショナリズムとの関係ならびに『平和・和解』理論の可能性」は再検討されてよいテーマである。西の思想の中に平和への道を示唆するものがあるとすれば、それは何であろうか。二点があげられると考えられる。第一は日本の国民道徳は人類の道徳の特殊相として考えられており、他国の道徳と融合するものと考えられていることである。西は「世界の平和は諸国民各自己に眞實に、其天賦の国民性に忠実にして、独特の文物を創造して、互に他の文物を尊重するによりて、得られるべき理である。」<sup>(1)</sup> さらに西はいう。「眞の平和は唯相愛し、相敬し相為めに計ることによりて得られる。而して愛すべきもの美はしきものは天真の流露せるもの、天下一あって二なき特殊の趣きあるものである。醜なるものは模倣品である。敬すべきものは獨立獨行の精神であって、最も卑むべきは自己を失へるものである。自ら重んずるものは人を敬し、自己の本領を愛護するものは他人の個性に同情し得る。果して然らば人類同胞の感じを動かして平和を致す永遠の道は、互に自己の本領を磨くにあると云はねばならぬ。」<sup>(2)</sup> 要するに個性の伸長は、それが敬愛を伴うならば人類同胞と共同歩調をとることができるということである。そのためには自己を絶えず磨く修養と反省とが不可欠であると西は主張する。

第二に、人類の平和を決定する「絶対的標準」はあり得ないと西はいう。「實在の普遍性は人類理想の劃一によりて達せられるのでなく、其内面的絶対性に於て示される。人間で云へば純正誠實の心術に於て道義の普遍は存する。心術に於ては敵も味方も肝膽相照らし、四海同胞主義も國家最上主義も相通ずる所あるべきである。而して人類の平和一致も此點より発すべきである。即互に他の理想、他の主義、他の特色を尊重し、人類生活の内容の種々に豊富なることに於て文明の進歩を期すべきである。」<sup>(3)</sup>

以上のように、西は平和への道を「内面的絶対性」に求める。その根本には西の儒教や仏教的教養の豊かさをうかがうことができ、その思想は今日でも依然として考えられ、生かされ得る。

本書の中でもう一つ高く評価されるのは第二の資料編である。これは西研究をこれから進めてゆく人にとって貴重な知的遺産である。西の思想と学問の方法は戦後の広島大学大学院の設立において生かされた。大学院の二講座（「独逸倫理学」と「英国倫理学」）は森瀧市郎教授による発想であるが、その淵源は西晋一郎の思想とその方法にあった。西はその諸著においてプラトン、アリストテレス、プロティノス、カント、フィヒテ、ヘーゲルに言及することが多く、他方、ベンサム、J.S.ミル、グリーン、シジウィックに言及する。森瀧が昭和6年広島高等師範学校教授として着任したとき、西は若き森瀧にシジウィック研究を勧めたという。森瀧は昭和40年2月20日の退官の最終講義において「私は西倫理学から影響を受け、それを受けついで形である」と述べ、西倫理学の体系を理法と生命と失明する。森瀧は以後「人類は生きねばならぬ」という信念により反核運動に徹した。その根底には西哲学の生命の普遍の実在を實踐によって具体化する使命感があった。西の思想は比較思想の方法を含んでおり、広島大学大学院でこの方法を発展したと見られる教授は西の弟子であった山本空外である。プロティノスと仏教との比較研究による「無二的人間の形成」論は西の思想の発展と見ることができ、その影響は今も生きている。なお、森瀧は西の女婿である。西の次女（しげ）は森瀧の妻である。森瀧しげの「我が夫を語る」は生前の森瀧教授を知る貴重な証言である。<sup>(4)</sup>

（岡山大学名誉教授）

## 註

(1) 西晋一郎『倫理哲学講話』、育英書院、大正4年、昭和3年訂正8版、54頁。

(2) 同上 55頁。

(3) 同上122頁。

(4) 行安茂編『森瀧市郎先生の卒寿を記念して』大学教育出版、平成3年、7-18頁